

日本語教育メディア・システム開発部門報告

村上 京子・石崎 俊子

日本語教育メディア・システム開発部門 (JMES) では、2004年度に以下の活動を行なった。

1. オンライン日本語コースの運営
2. オンライン日本語文法学習教材 (WebCMJ) の改訂
3. オンライン漢字コースの教材作成
4. Academic Consortium 21 (AC21) 協定校を対象としたニーズ調査
5. 日本語・日本文化研修生に対する「日本語情報技術」授業の担当

1. オンライン日本語コース (中上級読解・作文コース)

全学の留学生、外国人研究員などを対象に実施している全学向け日本語講座は、受講したいという希望があっても授業時間に他の授業などが重なり、出席できない学習者が多いことがかねてからの問題であった。2000年の全学留学生を対象としたアンケート (注1) でもインターネットを利用したコースの希望が多数寄せられていた。また、全学の教師を対象にした日本語教育に関する調査 (注2) でも、「作文を指導して欲しい」、「文章作成スキルを高めて欲しい」という要望が指導教員の側からも高いことがわかった。

このことから、中級から上級への読解能力の橋渡しの教育、アカデミックな文章を書くスキルの養成教育が必要とされていることを確認し、これをふまえ、全学向け日本語プログラムの中に、コンピュータを利用した授業を開講することになった。希望の多かった読解と作文能力の養成と保持を目的に、オリジナルの読解教材を学習者に配布し、学習者からの解答に対するフィードバックを返すという日本語読解・作文授業が前期と後期に設けられた。

前期

前期授業期間においては、読解教材と課題を Word 文書のメールの添付ファイルとして学生に配布し、解答を書き込んだファイルを教師が採点・添削し、再び

メール添付で送り返すという方法で、14回分の問題がやりとりされた。中級レベルを修了した学習者を対象に毎週1回600字程度の読解文と問題が送付される。受講者は文章を読み、語句や漢字の確認、意味理解を問う問題に答え、さらに問題文に関連した作文 (200字~400字) を書く課題に解答する。前期は7名の学生が登録し、4名の学生に修了証が出された。残りの3名については途中まで解答を返信していたが専門の研究が忙しくなり中断した者と、レベルが合わない (難しすぎる) ため解答しなかった者がいた。メールのやりとりであったため、学習者に問題の送付がすぐ伝わり、問題文以外にもやりとりができた。週1回設けたオフィスアワーに質問や相談に定期的に来る学生もおり、実施の手ごたえが得られた面は評価できた。

解答の採点・添削はできるだけその日のうちに返すことを心がけて進めていったが、1人の教師が学習者一人一人にフィードバックすることは負担が大きい。より効率的な方策を検討していたところ、情報連携基盤センターから WebCT Vista というシステムの利用を示唆され、後期から導入することになった。

後期

WebCT Vista に前期と同様、読解・作文の問題文と課題を載せた。質問形式が多種類である WebCT Vista の利点を生かし、語句や漢字の確認、意味理解の読解質問を作ることを試みた。これらは自動採点システムで学習者に即時に判定が知らされる。しかし文章の要約、感想・意見を述べる作文については、教員の添削が必要なため、前期と同様に、解答を Word 文書に移してから、添削を行い、メールで直接学生に返却することにした。

また、学習者に毎週問題の更新を知らせるために、新たに作成した読解問題が公開されるとともにメールツールを利用して学生に問題の更新等を通知する方法を試みた。

開講時のオリエンテーションには12名の学生が参加した。毎週火曜日に1回分の読解問題を学生に公開した。理系の学生が多かったため、理系の学生が興味を

持つような分野の文章を用意した。漢字などについては、ネット上のリソースで学生が調べることができることを前提としたので、制限を特に設けなかった。WebCT システムの自動集計を利用することによって、コースを続けて受講した学生は8人で、1 回分の問題に対して 2, 3 回チャレンジする学生もいたことがわかった。

情報連携基盤センターのスタッフの協力のおかげで、今回はじめて WebCT Vista の利用を試みたが、問題送付や読解のフィードバックに関しては教員の負担が軽減したことと、学生が WebCT Vista を使うことには予想したほどには抵抗がないことがわかった。今後 WebCT Vista の機能を活かした問題の作成、フィードバックの仕方を工夫していきたい。

注 1) 村上京子 (2000) 名古屋大学留学生日本語学習調査「国際化の視野からみた言語文化科目の教育改善」報告書 pp. 27-81

注 2) 村上京子 (2004) 日本語教育に関する全学調査 教員アンケート結果報告 <http://www.ecis.nagoya-u.ac.jp/opinionpoll.pdf>

2. WebCMJ の開発と改訂

名古屋大学版初級教材の改訂 (Course in Modern Japanese vols. 1 & 2, Revised edition) に伴い、1998 年に Web 化した WebCMJ も全面改訂を行なった。新しいバージョンでは、これまで実現しなかった成績の管理システムや多言語 (中国・台湾・韓国) 版も加え、より充実したものになった。

1) 開発・改訂の経緯

名古屋大学出版会から1983年に『A Course in Modern Japanese Vol. 1 & 2』が出版された。これはアカデミック・ジャパニーズ (大学で用いられる日本語) の基礎を培うことを目的とし、大学や大学院での活動を主な会話場面とした初級日本語教科書であり、基礎的文法力と共に、コミュニケーション能力、社会言語学的能力の養成と、音声言語理解力が獲得できるよう編集されている。その文法及び漢字学習補助教材としてコンピュータ教材 CMJ が開発された。これは、当初は stand-alone で動いていたが、その後インターネット発信ができるように改善した。これが1998年に完成した WebCMJ (Original) である。

その後 改訂版『A Course in Modern Japanese (改訂版) Vol. 1&2』(名古屋大学日本語教育研究グルー

プ、名古屋大学出版会2002) が出版され、その内容にあわせて 問題・形式等を全面改訂した WebCMJ (New edition) が公開された。以上の開発は、留学生センター教員が中心となり、コンピュータ・システムのソフト開発業者に一部発注する形でなされてきた。

WebCMJ (New edition)

<http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/webcmjml/>

WebCMJ を使用するための説明の文章や問題指示文は、2003年の時点までは、英語でのみ表記されていたが、日本語学習者の世界分布を考えたとき、学習者人口のもっとも多い韓国・中国の学習者の利便性を配慮して、韓国語、中国語 (簡体字)・中国語 (繁体字) による WebCMJ 多言語版の開発が2004年度に行なわれた。

2) WebCMJ の特徴

国内外の初級日本語学習者を対象にした文法に関する問題が20課構成で、合計約2000問の問題が含まれている。各文法項目につき、穴埋め問題、選択問題、正誤判断問題などが出題され、学習者が解答を入力し、正誤フィードバックを受けた後、要求すれば正答を見たり、その課の成績や所要時間を表示できる。そのため、学習者は個人で自習用に使用することもできる。無料でいつでも学習ができ、特に海外で学習する学習者にとっては有効な学習教材であると考えられる。さらにまた、クラス単位で教師が学習者の成績を管理しうる機能も組み込まれているため、授業で運用することも可能である。

3) WebCMJ の今後の改善

名古屋大学留学生センター日本語 EJ コース、IJ コース、SJ コースで補助教材として使用しており、その使用報告から問題点を取り上げ改善していく。現在、クラス運用時の成績表示の改善案等出されており、検討中の事項数点に取り組んでいる。

また、海外の学習者・教師からの声にも留意し、できるだけ多くの学習者の便宜を図っていく予定である。

留学生センター日本語教育メディア・システム開発部門の教員を中心に月に 2 回前後の検討会を開き、必要に応じ業者やアルバイトの支援をうけながら作業を進めている。

3. オンライン漢字コースの教材作成

2005年度からはじまる全学留学生対象「漢字コース」の副教材としてオンラインで漢字が練習できるような教材を作成した。学内の情報連携基盤センターの協力を得て行なわれた。このシステムに関しては、2005年度4月公開に先駆け、3月の日本語教育方法研究会で発表し、他大学日本語教育教員との情報交換を行なった。

4. Academic Consortium 21(AC21) 協定校を対象としたのニーズ調査

大学の国際交流に関する中期目標の中でも重要な位置を占める AC21事業の一環として、日本語教育支援

に関するニーズ調査票を協定校の日本語教育担当者にインターネットを通じて送った。この回答を集計し、今後の開発の方向性を検討していくつもりである。3月現在、まだ未回収の大学が多いが、回収終了後分析し、結果をまとめ、公表していく予定である。

5. 日本語・日本文化研修生に対する「日本語情報技術」授業の担当

前年度に引き続き日本語・日本文化研修コースの授業の1つとして開講されている「日本語情報技術」をJEMS教員が担当したもので、23期生によるホームページ作りを行なった。(<http://topaz.ecis.nagoya-u.ac.jp/%7Eichinen2003/>)